学位論文要約

原　愛

論文題目

不整合性と寸法に見るセナンク修道院の中世における建設

論文要旨

本研究は、中世シトー会修道院の中でも有名なものの一つであるセナンク修道院の建築を例として、その建築的特質を明らかにしようとした論文である。セナンクの建築を自ら詳細に実測し、正確な実測図面を作成し、かつ詳細に現地での観察を行い、こうした考古学的な調査を基にこの建築が実際に中世の時代にあってどのように建設されてきたか、そして中世の職人が建設の際何を重要としたのかに着目したものである。

この修道院の 12 世紀の中頃から 13 世紀の初めにかけて建設された、いわゆる中世建築の箇所には、比較的統一した計画をもって、同じ寸法や同じ形状で作られるのが通常であるような箇所に、例えば石目地や平面の形状にずれや歪みなど本稿で言うところの不整合が数多く存在する。

方法として、まず目視観察により上述した不整合を列挙し、次に我々の実測により得た数値から寸法分析を行い、それぞれの不整合性の原因をその観点ごとに、あるいは複数の観点から総合的に考え合理的な説明を求め、セナンク修道院の建設の実態の検討を行った。従って、本研究の大きな特色として、フランスでは未だ既往研究の数が少ない寸法を重要な要素の一つとして考えているところにある。このために、当然ながら本研究は、詳細な現地での実測調査に深く依拠してなされている。

本論文の構成は、第 1 章で既往研究による建設プロセスと中世の建設現場の再現に関する研究について述べる。次に各章ごとに、セナンクの教会堂や回廊といった諸室について、それらの建築に見られる不整合を目視観察と寸法分析により考察する。第 6 章では、これらを再度目視観察と寸法分析を整理し、修道院全体の建設プロセスを提示し、第 7 章を結論とする。

その結果、教会堂の建設途中に決定された一つの計画変更により現状が見せる様々な不整合が起きたことが明らかとなった。従来言われてきた建設プロセスと、本研究が明らかにした寸法による建設プロセスは必ずしも一致しない。この寸法の不整合は、セナンクの建設には異なるアトリエが関わり、異なる物差しを使用していたことを示している。さらに、これらの不整合は、当時の建設現場では実際の建物の整合ではなく、計画、数字の上での整合を優先したためによることも示し得た。

本論文の結論は、従来我々が抱いていたシトー会建築あるいは中世建築のイメージをかなり覆すものである。少なくともセナンクに限って言えばこれまでの既往研究等が我々に伝えるイメージとは大きく異なる。セナンクを例に、多くの不整合性、改変、異なる職人集団に対応する複数の物差しの使用など、およそ近代の合理的な考え方を是とする一貫した統一性を持った建築とは全く異なる建築の在り方について明らかにしたものである。また、不整合や物差しといった要素が、こうした考古学的研究の有効な道具であることも示し得たと思う。建設の実態に即した詳細な建設プロセスの提示と不整合も忠実に表現した実測図を作成したことが本研究の最大の意義である。